

治療者ないし治療状況についてクライアントが見る夢の意義

名 島 潤 慈

Significance of Dreams about the Therapist or the Therapeutic Situation

Junji NAJIMA

(Received September 2, 1996)

It is not necessary to say that clients' dreams associated with therapeutic relations are of great importance for psychotherapy to proceed effectively. Dreams will be divided into two kinds: those about the therapist and those about the therapeutic situation. Dreams about the therapist are easily noticed because the therapist himself or a figure like the therapist appears in those dreams. However, dreams about the therapeutic situation tend to be missed because there is no figure except for the client. In dreams about the therapeutic situation, in almost all cases, the therapists are replaced by some objects. In the paper, I discuss the significance of dreams about the therapist and those about the therapeutic situation.

Key words: dreams about the therapist, dreams about the therapeutic situation

I 本稿のねらい

夢分析を主体にして面接を行っていると、クライアントの関心は夢へと向かい、クライアントは次第にさまざまな夢を報告してくれるようになる。つまり、「夜見られる夢(生理的水準の夢)」は「語られる夢(対人的水準の夢)」へと変容する。「語られる夢」は「コミュニケーションとしての夢」でもある。この、「語られる夢」の中には、治療関係にまつわるものが少なくない。

ここで、治療関係にまつわる夢を、「治療者の夢(dreams about the therapist, therapist dreams)」と「治療状況の夢(dreams about the therapeutic situation)」という二つのものに大別したい。

これら二つのもののうち、「治療者の夢」はさらに、(1)「治療者それ自身が現れる夢(dreams in which the therapist appears as himself)」と、(2)「治療者らしき人物が現れる夢(dreams in which the figure like therapist appears)」に分けたい。前者は文字通り、治療者自身が直接クライアントの夢の中に出てくるものであり、後者は治療者らしき人物、つまり治療者の持つ何らかの特性を有した人物がクライアントの夢の中に出てくるものである。一方、「治療状況の夢」は、治療者や治療者らしき人物がまったくクライアントの夢の中に出てこないが、しかし、治療状況がその夢の中に反映されていると思えるような夢である。一般的に言って、治療状況の夢では、治療者は何らかの物体(object)に置き換えられていることが多く、それだけに見過ごされやすくなる。

本稿では以上のような二種類の夢の意義を検討してみたい。なお、本稿で取り上げる事例は過去のものであるが、事例の記述にさいしては、クライアントのプライバシー保護のため細部を省略した。

II 治療者についてクライアントが見る夢

一般的に言えば、治療者についてクライアントが見る夢は、大変重要な意義を含み持っていることが多い。クライアントは治療者をどのような人間だと認知しているのか、治療者に対してどのような欲求や願望を抱いているのか、治療者に向けている転移の性質と内容はどのようなものなのか、逆に、治療者がクライアントに向けている逆転移の性質と内容はどのようなものなのか—およそこのような事柄を夢が知らせてくれることが多い。

以下、具体例として、ある女性クライアント（事例 A）と男性クライアント（事例 B）が見た夢を吟味したい。前者では治療者自身が、後者では治療者らしき人物像が出現してくる。

[事例 A]

1 クライアントの紹介

クライアントは初回面接時 30 代後半の女性。当時 3 回目の入院中。1 回目は離婚にまつわるトラブルで入院。2 回目（退院して 5 年後）は隠しカメラや盗聴器で監視されている、自分を迫害している人物の音が聞こえる、自分は人体実験をされているといった訴えと、心理的に追いつめられたことによる自殺未遂などで入院。3 回目（退院して 3 年後）は仕事がうまくさばけなくなり、頭の中が混乱して入院。クライアントとの面接は 2 回目入院中から開始された。ここで取り上げる夢は、3 回目の入院中のものである。

2 面接経過

3 回目の入院後、治療者（筆者）は改めて週 1 回のペースで面接を行った。面接では、治療者は 2 回目の入院中の時のようにクライアントの迫害妄想そのものの真偽について議論するのは避け、迫害されつづけているというクライアントの人間的な苦しみのほうに焦点をあてるようにした。このクライアントは自己の内的な心の動きを言語化することが大変むづかしい人であったが、それでも彼女は治療者側の動きの変化につれて、故郷（生家）への郷愁、窮屈であった結婚生活の回想、前夫が育てている我が子への思い、なぜ自分だけが人々から執拗に迫害されるのかという割り切れなさ、頼れる人のいない寄るべなさ、入院中に知り合った男性患者の話、知的に優秀な同性に対する競争心と劣等感など、これまでの内的生活史を少しずつ振り返りながら語っていった。

当時のクライアントが抱えていた心理的テーマにはいろいろなものがあったが、その最大のもの、「故郷喪失」であった。例えばクライアントは 34 回目の面接で、「生家から買物に出て汽車に乗って帰ろうとしたら、全然見覚えのない所に行って帰り道が分からなくなる。すごく悲しい感じ。何かどん底に、地の底に落とされたような感じがする」という夢を報告した。生家の夢は時々見るのだという。それにしても、クライアントがこのように感情の籠もった夢を報告するのは珍しいことであった。クライアントはまたこの回の面接で、自分の性格の中にある冷たさは中学時代の両親の離婚の影響によるもので、どこにも暖かい家庭がない、暖かさを求めても求めても満たされなかったと述べた。クライアントが生まれ育った家は両親の離婚後数年して父親が既に他人に売ってしまっていた。また、クライアントが 10 代の終わり頃、父親も母親もそれぞれ別

の人と再婚してしまっていた。このように、夢の中の生家はクライアントの求める暖かさの象徴であり、いわば心の故郷の象徴であった。クライアントはこの夢から覚めた時、ここは病院だったと分かってほっとしたという。

3 クライアントが見た治療者についての夢

次の夢は43回目の面接でクライアントが報告したものである。前夫との離婚の経緯と離婚にまつわる不快なトラブルをクライアントが語った42回目の面接の次の日に見たもので、クライアントが治療者の夢を見たのは初めてだという。

[治療者がアドバイスする夢]

姉や友だち、知らない人なんかと一緒に八百屋に買物に行くことになる。どこに行こうかと皆でガヤガヤ話していたら、遠い所から、私のすぐそばではなくて5メートルくらい離れた所から先生（治療者）が、あっちの方（店）よりこっちの方が安いよと言った。

夢は以上のように短いものである。クライアントによれば、結局八百屋に行ったかどうかははっきりしない。治療者が安いと言う方の店に行ったようにも思う。また、具体的に何の野菜を買う予定だったかもはっきりしない。夢の中の治療者はいつもの治療者。夢の場所は今クライアントが入院している病院の庭だという。この夢についてのクライアント自身の感想は、「別に何も。あー、夢を見たなーという感じ」というものであった。

4 治療者についての夢の意義

この夢には、クライアントと治療者との距離の様態がよく出ている。クライアントの2回目入院中の面接では、治療者はクライアントの主張の真偽について論議していたのである。今回の入院では、治療者はできるだけ真偽問題を手控えて、クライアントの心の営みの方に焦点を合わせるようにした。このやり方だと、治療者の関心ではなくてクライアントの関心の方に沿っていくことになるので、クライアントの心がぼんやりしている時などは治療者としては所在ない感じに襲われることもあった。しかし、それはそれでよかったように思える。

夢の舞台はクライアントが入院している病院の庭であり、そこに治療者が登場していることとも考え合わせると、舞台は治療の場を表しているよう。姉はクライアントが以前から敵意を抱いていた人であるが、その姉やその他の見知らぬ人たちとどこの八百屋へ行こうかとガヤガヤ話しているのは、このクライアントの友好的な対人関係の拡がりを感じさせる。そして、この夢の中では、治療者はクライアントたちのすぐ側ではなくて、彼らとは少し離れた位置からクライアントたちに対して、どこの店が安いかという現実的なアドバイスを行っている。治療者が最初拘泥していた迫害妄想の真偽よりも、クライアントの心の営みの方がクライアントにとってより「現実的」であったように思える。この夢についてのクライアントの感想は何もなかったが、治療者はこの夢を聞いて、改めて治療者のやり方でよいのだと思えた。[このクライアントとの面接は治療者側の事情によって65回目面接で終了し、治療は別の治療者に引き継がれた。クライアントは約1年後に退院し、病院の近くにアパートを借りて自活しはじめた。その後の幾度かの手紙によれば、いろいろと難しいことはあるものの、かつてクライアントが身につけた技術を生かしながら何とか社会生活を送っているとのことである。]

[事例 B]

1 クライエントの紹介

クライアントは、初回面接時 30 代前半の男性。大学卒業後、さまざまな職場を転々とした。しかし、いずれも長くは続かなかった。主訴は、物に対する破壊行動や孤立感といったものであった。

2 面接経過

面接に入ってから浮かび上がってきたクライアントの問題は、周囲の期待に応えられなかったという挫折感、自分が他人から軽蔑されているのではないかという不安、過去において自分が馬鹿にされた思い出が蘇ると物を壊したくなるといったものであった。

クライアントは、面接当初から数多くの夢を報告した。ノートに夢日記をつけていて、毎回の面接のさいにそれを持参して読み上げた。あまりに夢の数が多いので、治療者は 4 回目の面接の時に、これからは 1 週間に見た夢の中で、できるだけクライアントにとって一番印象に残った夢だけを報告するようにと頼んだ。

クライアントはさまざまな夢を見たが、夢のテーマだけ拾えば、女性や子どもに馬鹿にされる夢、化け猫や老人と戦う夢、化け物が出てくる恐怖の夢といったものがあつた。これらの夢についてのクライアント自身の感想や、夢の構成要素についてのクライアントの連想の中には、大学時代の屈辱的な思い出や、他者に認めて貰いたいという強い欲求、現実に目を向けないで空想の段階にとどまっている自分、知的な女性から尊敬されたいという欲求、これまでいろいろなことをやってきたが、本当は何をしてよいかよく分からないという方向性喪失状態などが表明された。

3 クライエントが見た治療者らしき人物についての夢

面接の 19 回目にクライアントは、結局何になりたいのかという治療者の間に答えて、何でもやれるなら研究職かジャーナリズム、医療職と答えた。これらのうち、医療職については、試験がむつかしいので自分としてはなる自信がないと言う。そして、クライアントは不意に、臨床心理士になるにはどうしたらいいかと治療者に質問した。このクライアントはもともと、臨床心理や福祉の領域に関心があつた。そこで、治療者はあまり深く考えずに、認定臨床心理士になるためのコースや受験資格をクライアントに説明した。

20 回目にクライアントは、きっぱりとした口調で、臨床心理士になりたいと言つた。しかし、次の 21 回目には、いろいろと調べてみたが臨床心理士になるのはむつかしい、ある大都市にあるカウンセラー養成の学校はどうか、1 年間の課程だと言う。治療者はこれを聞くと妙にいらいらして、認定臨床心理士になるのがむつかしいからといってそのような学校を選ぶのは少し安易な選択ではないか、一生臨床心理士としてやっていくなら、やはりこれからは大学院の心理学系の修士課程まで終えておくことが大切ではないかと応じた。そして、クライアントの場合、文系の大学まで出ているので、心理学科の 3 年生への編入は可能かもしれないと示唆した。

22 回目、クライアントは、前回の治療者の示唆を受けて、いろいろな大学に対して電話で編入の可能性を問い合わせてみたと言つた。

次の夢は、クライアントが治療者との 22 回目の面接の 2 日後に見たものである。夢が報告されたのは、23 回目の面接であつた。

[中年の男性教師が怒りだす夢]

私は大学の教室で心理学の授業をうけている。教室には女子学生も含めてかなり多くの学生がいる。私は回ってきた出席簿のノートに自分の名前を書き、授業の終了直前、出席簿を先生に出して帰ろうとする。すると、その、40代の中年の男性教師が怒りだし、次は社会学の授業があるだろう、馬鹿にしているのか、それとも人を見てものを言っているのかと言う。私は席に戻る。そして、授業が終了後、私は先生の所へ行き、必死に言い訳する。すると先生は、もういい、縁を断つと言う。私は、以前心理学をとっていたが途中でやめた、後悔している、で、今度は真面目にやりたいと言う。先生はフンフンと聞いている。そこで目が覚める。

この夢についてのクライアント自身の感想は、「心理学に行けというメッセージ」であった。そして、男性教師についての連想は、「知的というよりも職人風の男性」、縁を断つという男性教師の言葉についての連想は、「父が息子を勘当するような感じ」であった。また、クライアントが夢の中で授業の終了前に教室を出ようとしたことについての連想は、「まだやる気がないという感じ」とのことであった。クライアントはこの時点で、臨床心理士になるためにいろいろな大学に学部編入の可能性を問い合わせていたが、まだどこからも返事が来てなかったのである。

この夢の中の男性教師は、直接的には治療者そのものではない。しかし、治療者は面接当時、40代半ばすぎであった。40代の男性で、しかも、大学の心理学の先生というと、治療者自身が該当する。この夢は、面接場面における治療者の動きがクライアントの無意識には、クライアントの言葉通り、あたかも父が怠け者の息子を「勘当」するかのよう映っていたことを示している。実のところ、それまでの治療者は、自分の弱点を折にふれて口にするクライアントがなぜ現実に向かって一歩踏みだしていかないのかと内心じれたい思いがしていたし、また、口に出してそう言ったこともあったのである。Racker (1968) の言葉を借りれば、治療者はクライアントに対して補足型同一化 (complementary identification) をおこしていた訳である。より具体的に言えば、治療者はクライアントの中の内的対象 (この場合は父親) と同一化し、いわばクライアントの父親になりかわった形でクライアントを叱咤激励していた訳である。

結局、この夢は、(1) クライアントが治療者と同一化して、治療者と同じような臨床心理士への道を目指そうとしていること、(2) しかし、これは同一化による仮の選択であり、クライアント自身としてはいまだはっきりとした意欲が持っていないこと、(3) 治療者自身がクライアントに対して感じていた苛立ちは、クライアントの夢の中ではより拡大化されて、怒れる教師としてイメージ化されていることなどを示している。[(3)の治療者の苛立ちはおそらく、面接場面における治療者の口調や表情を介してクライアントに伝達され、伝達されたものがクライアントの夢の中に拡大化された形で出現したものと推測される。] 治療者はこの夢の吟味の後、クライアントとの心的距離を絶えず意識するようになり、同時にまた、クライアントのさまざまな夢の中に見え隠れしている父-息子関係に注意を払うようになった。

ちなみに、クライアントは後の33回目面接で、再び40代の中年の男性の夢を見たと報告した。その夢は、「私はクロールの試合に出ることになり、そこでまず(プールサイドからの)飛び込みの練習をするが、下手なので見ている人たちが笑う。私は緊張して泳いでいる。そこで場面が変わる。どこかの部屋の中。水泳で人生を切り開き、今は引退していると言う男性が私に話をする。話の内容は、カプセルホテルに泊まってテレビで水泳を見た」というものであった。クライアントによれば、男性は40代の中年で、顔は見知らぬ人だと言う。ここにも治療者らしき人物が出現しているが、前回の心理学の男性教師と比べると、今回は水泳の先達で、それだけ類似度は減

少している。立場も、「教師」(教える人)から「先達」(先に達した人)へと変化している。しかも、前回の男性教師はクライアントに怒りを発したが、今回の水泳の先達は、自分は水泳で人生を切り開いてきた、(水泳界を)引退後はテレビで水泳を見たという「しみじみとした口調」(クライアントの言葉)であった。なお、クライアントは夢の中の「人生を切り開く」という構成要素についての連想で、クライアント自身の父親(50代後半)のことを思い浮かべた。つまり、この夢の中の男性像は、実は、40代の治療者と50代の父親のイメージとが合成されたものであった。

4 治療者らしき人物についての夢の意義

この事例では、数多くの夢を次から次へと報告するだけで、夢の持つ意義を自ら汲み取っていかうとしないクライアントに対して、また、周囲を攻撃するだけで自分の受動性と本格的に取り組もうとしないクライアントに対して、治療者は苛立ちに襲われつづけていた。そして、実際に面接の中で治療者はクライアントに対して叱咤激励したこともあった。あのままいけば、おそらくクライアント側の自己尊敬(self-esteem)は減少し、治療の中断という形になってしまったのではないかと思える。その意味ではこの夢は、転移-逆転移構造と、クライアントに対する適切な距離の取りかたとを治療者に教えてくれるものであった。

Ⅲ 治療状況についてクライアントが見る夢(治療状況の夢)

クライアントが見る夢の中には、治療者ないし治療者らしき人物がまったく出現しておらず、したがって、一見その夢は治療とは無関係のように思えるが、しかし、その夢を見る直前の治療者との関係が夢の中に色濃く反映されているような夢がある。これを「治療状況の夢」と名づけておきたい。

以下、この治療状況の夢について、事例をもとに検討する。これは、筆者がスーパーヴァイザーとして個人スーパーヴィジョンを行ったもので、治療者であるスーパーヴァイザーの栗崎は、既に別の所でクライアントとの面接経過を発表している(栗崎, 1995)。

[事例 C]

1 クライアントの紹介

クライアントは女性で40代後半。休職中。30代後半で発病。主訴は、正体不明の電波に苦しめられる、隠しカメラや盗聴器で毎日の生活を監視されている、テレビやラジオで自分のことを言われるといったものである。

2 面接経過

2回目の入院中、クライアントは病院の中にある心理室にやってきて、彼女がこれから受ける予定のある治療のことで治療者(栗崎)と話し合い、その結果週1回のペースで心理療法が開始されることになった。

治療者との面接経過は、第1期：主治医の示唆により認知療法を介して兄嫁との関係改善を目

標とした時期、第2期：復職か退職かでクライアントが動揺した時期、第3期：退院前後の安定した時期、第4期：クライアントを取り巻く環境の変化と治療者の逆転移が重なり心因反応を引き起こした時期、第5期：神経症的症状の消失後注察妄想と結びついた電波が主訴になりはじめた時期、第6期：電波に打ち勝つことよりも、電波と共存していく道を模索しはじめた時期という六つに分けられる。

本稿で取り上げる治療状況の夢は、第4期においてクライアントから報告されたものである。なお、治療者へのスーパーヴィジョンは、第1期の途中から開始された。時間の関係で、数回分の面接をまとめて検討するというやり方であった。

3 クライアントが見た夢

クライアントは治療者との面接の中で、入院前に同居していた兄嫁に対する劣等感や兄嫁への対処法を整理し、退院後無理して復職するかそれとも退職金を貰って退職するかという問題に対してはとりあえず1年間の休職という結論を出した後、3月初めに退院に至った。面接を開始して約7カ月後であった。

退院後のクライアントは兄嫁ともうまくやっていたが、3月末、不意にパニック状態(身体の震え、流涙、極度の不安感、焦燥感、自殺念慮)に陥り、治療者の助けを求めた。自分の病気はもはや一生治らないのではないかとクライアントは言う。これに対して治療者は電話や頻回の外来面接によって対処し、クライアントは次第に落ち着きを取り戻していった。

4月に入るとクライアントの父親の身体の病気という新しいストレスが加わって「落ち込み」(クライアントの言葉)が続いたが、化粧や身だしなみもきちんとし、時折笑顔が出てくるようになった。ただし、クライアントがことあるごとに「私は一生治らないんでしょう？」と畳みかけてきたり、不安感が高まった時には治療者の自宅へ頻繁に電話してきたり、予約時間外に面接室にやって来たりするといった状態が続いたので、治療者は内心辟易としていた。

ところで、5月下旬の面接の時、クライアントは、もう二度と働けないのではないかと不安と症状悪化への恐怖を語った後、昨夜見たという一つの夢を治療者に報告した。その夢は次のようなものであった。

[熱湯をかけられる夢]

熱湯を顔や頭にかけてられ、しかも、タオルを口に押し込まれているため声も出せずに苦しんでいる自分を、少し離れた所にいるもう一人の自分が見て、(熱湯をかけられて苦しんでいる自分の)代わりに叫び声を挙げる。

クライアントはこの夢を報告した後、「何とも気分が悪い夢でした。もう私はお先真っ暗です」と述べた。治療者はクライアントに対して、治療者なりの夢の解釈を与えた。それは、熱湯はクライアントに降りかかるストレスであること、夢の中でかけられたり押し込まれたりするのはクライアントの中にある被害者意識を示していること、苦しい状況ではあるが代わりに悲鳴を挙げることでできるもう一人の自分が育ってきていることなどであった。これに対してクライアントは、「へえー、そんな考え方もあるんですねー」と言っただけであった。

4 スーパーヴィジョンの場における夢の意味の検討

「熱湯をかけられる夢」は、6月初旬のスーパーヴィジョンの場において検討された。スーパー

ヴァイザー（名島）はこの夢を聞かされた後、治療者に対して、「この夢の中には、熱湯をかけている人物の姿は出現していない。しかし、クライアントに対して熱湯をかけているのはたぶん治療者自身であろう。いや、むしろ熱湯＝治療者と言ってもよい。確かに治療者は表面クライアントをサポートしているが、内心クライアントとの関係を切りたがっている。このような治療者側の気持ちは、治療者にすがっているクライアントにとってはまさに頭から熱湯をかけられるようなものではないだろうか。つまり、この夢はクライアント側の見捨てられ不安を反映しているのではないだろうか」と述べた。

治療者はこのスーパーヴァイザーの指摘によって初めて治療者－クライアント関係の性質を自覚し、以後、腰を据えてクライアントとの面接に臨むことができるようになった。治療者である栗崎（1995）自身の記述によれば、第4期からの面接経過は以下のようなものであった。

第4期に入り、外的ストレスに振り回されたクライアントは、必死の思いで治療者にしがみついてくる。それに対して治療者は、クライアントの期待に十分応えられない自分に次第に自信をなくし、無意識のうちに、外面ではクライアントを支持しながら内面では切り離そうとする態度をとってしまう。まさに逆転移を起こした訳であるが、治療者はここでも力量不足のため自分ではこの一連の動きが見抜けなかったし、それを指摘された後もクライアントがおそらくこの時期に感じたであろう治療者への不信感を十分に明確にさせないまま終わってしまう。ただ唯一の救いは、治療者が自分の逆転移を自覚した時点で、無力感を味わいながらもクライアントのもとに踏みとどまる努力をしたことである。これは決して容易なことではなかったが、結果として、認知療法ではガイド的な役割しか果たせなかった治療者がここにきて初めて、クライアントにとって共に考えてくれる相手になれたのだと思う。だからこそ、クライアントを悩ます注察妄想の大本とも言える電波のことが、ようやく面接の中ではっきりと言語化されるようになってきたのではないか。

さて、第5期に至ってやっと治療者は、クライアントの根強い自己否定に迫るべくたびたび電波の解釈を試みた。しかし、洞察が進みそうになると、再び電波の妨害が起こり、そのたびに支持的姿勢に戻らざるをえない状態が続く。おそらく電波には、クライアントの厳しかった母親やクライアントの劣等コンプレックス、あるいは依存対象を求めてもそれが満たされない葛藤や不満、怒り、不安感といったさまざまな要因が影響しているのであるが、現在のクライアントにそれらを認めるだけの自我の強さはない。

第6期になると、「共存していく」という治療者の言葉を借用することで電波に対する介入への牽制が行われ、同時に治療者に対しても少し距離を置こうとする姿勢が出てくる。別な見方をすれば、これはクライアントの抵抗である反面、距離を置いて不安定ながら自立が可能になってきた証とも言えよう。なぜなら、そうしても以前のように激しい分離不安を生じることはなく、むしろ、電波に悩みつつも生活の枠は拡大の傾向を示したからである。このように考えてみると、明確な治療方針もなく浮き草のように頼りない面接の積み重ねではあったが、少なくとも治療者がクライアントの希求していた相談相手の役を果たしたことは、クライアントの自尊心を高め、主体的・能動的な構えを育てる上で意味があったのではないだろうか。

以上が治療者自身による第4期以降の面接過程の考察である。ちなみに、治療者は次の年の初めに遠隔地に転居したので、このクライアントとの治療関係も終了した。終了前のクライアントの状態は、(1) 相変わらず心理的なストレスがあると電波がかかってくる、(2) しかし、電波が

来るなどと思うと早めに睡眠薬を飲んだり外に出て畑を耕すといった対処行動がとれるようになった、(3)一緒に暮らしている長男がクライアントの良きサポート役となってクライアントを支えてくれている、といったものであった。

5 治療状況の夢の意義

治療者は、自分にすがりついてくるクライアントに対するうとましさと、心の病に苦しめられているクライアントを救うことができないのではないかという自信のなさからクライアントから心理的に遠ざかりはじめており、それはクライアントの側に強い見捨てられ不安を引き起こした訳であるが、言うまでもなくこれは治療上の危機であった。もしこの危機をそのまま放置していたら、おそらく治療面接は中断してしまうか、あるいは治療者がクライアントの迫害者のようにクライアントに感じられるような事態に至ってしまったのではないかと推測される。

このような状況において治療者は、クライアントの報告した「熱湯をかけられる夢」の意味を自己吟味し、その結果、クライアントにとっての「共に考えてくれる相手」となることができたのである。

IV おわりに

筆者は以前、クライアントないし治療状況について治療者自身が見る夢の意義を論じたことがあるが(名島, 1978, 1995)、本論文では逆に、治療者ないし治療状況についてクライアントが見る夢の意義を吟味した。具体的に言えば、事例 A では治療者の行っている治療の方向の再確認、事例 B では補足型同一化に基づく治療者側の逆転移の様態、最後の事例 C では治療者側の逆転移に起因する治療上の危機の様態をクライアントの夢が知らせてくれたのである。

クライアントが見る夢の中に直接治療者自身が出現していたり、治療者の持つ特性が夢の中に表示されたりしている場合には、比較的その夢の意味は把握しやすい。しかし、治療者が直接クライアントの夢の中に現れない場合(「治療状況の夢」の場合)には、ともすればクライアントの夢を治療関係と結びつけて考えるということが忘れられがちとなる。もしも面接経過の中で、治療者がクライアントに対して嫌悪や拒否感、うとましさとといった逆転移感情を抱いている時にクライアントが夢を報告してくれたら、たとえその夢が治療者とは何の関係もないように思えたとしても、一応その夢を治療者-クライアント関係という視点から吟味してみると、治療上有益なことが少なくない。実際、クライアントが報告してくれる夢は、それが特にクライアントにとって極めて印象的な夢である場合には、何らかの形で治療状況を暗示していることが多いものである。

筆者は最近、ある精神分析セミナーで夢分析の事例を発表した(Najima, 1996)。そのクライアントが治療終期に見た夢の中に、「顕微鏡で白血球を見つける夢」というものがあった。この夢についてクライアント自身は、仕事の夢だと述べた。筆者自身の解釈もその線に沿ったものであった。つまり、それまでのクライアントの夢は、クライアント自身が直面していた心理・社会的危機、例えば生きかたの問題や家族の問題などを意味していたが、この「顕微鏡で白血球を見つける夢」は、クライアントがそれまでのさまざまな問題を整理してクライアントの仕事に復帰できる心的態勢を示しているものと筆者には思われた。実際、顕微鏡を使って白血球の数を数えるのは、クライアントの日常の仕事の一部であった。また、クライアント自身、白血球に対する連想

として、「細菌などを食べる。外敵から身を守る」と述べていた。しかし、コメントの Dr. Leah Davidson (精神分析家) は筆者に対して、クライアントが白血球を見つけたということは、外敵 (細菌) から自分を守ってくれる治療者 (白血球) を心の中に内在化したことを意味するのではないかと述べた。要約すれば、細菌をやっつける白血球を筆者はクライアントの能動的な構えとしかみていなかったのに対して、Davidson は治療者である筆者とみる見方を提示したのである。

クライアントは「顕微鏡で白血球を見つける夢」を筆者に報告した回の面接の最後に、「もう自信が出てきたし、何とかやっつけていけそう」だと述べて治療の終了を提案し、筆者も了承した。この夢は上述の栗崎の事例のように治療的危機を意味するものではなかったし、また夢の中には一人の人物像も出現していなかったが、外敵から自分を守ってくれる治療者という治療者像を内在化し、その内在化によって生きる自信を取り戻したという意味では治療状況の夢に他ならないものであったと言えよう。

引用文献

- 栗崎幾子 1995 電波に悩み続けるクライアントとの面接経過 九州臨床心理学会第23回大会発表論文集, 60-61.
- 名島潤慈 1978 逆転移の吟味過程における夢の意義—ある自殺未遂者(自己愛的人格)との心理療法中に治療者が見た夢を通して— 広島大学教育学部紀要, 第1部, 第26号, 327-337.
- 名島潤慈 1995 精神分析的な心理療法における夢の利用 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 44, 333-361.
- Najima, J. 1996 Dream Analysis of the Waterfall dream. Presented to the One-Week Seminar on the Interpersonal Approach to Psychoanalysis at the William Alanson White Institute of Psychiatry, Psychoanalysis and Psychology, July 19, New York city.
- Racker, H. 1968 Transference and Countertransference. London: Hogarth Press.